

ドクター・ハザマの



バイタルサイン塾 16

薬剤師における「謎解き」の重要性

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

チーム医療で他職種の信頼を得るには「謎解き」が効果的

なぜ、薬剤師に「謎解き」が必要だと思うのか。それは、私が医師として診療する際に、「謎解き」の重要性を痛感しているからです。とくに、患者さんとの信頼関係を構築していき、チーム医療に参画する他の医療専門職からの信頼を勝ち得るには、「謎解き」が効果的です。

薬剤師が、「薬剤の専門家」ではなく「薬物治療の専門家」としてチーム医療の一員として活躍する医療人となるためには、患者・医療専門職双方との信頼関係が重要という観点から考えると、「謎解き」の重要性がご理解いただけるのではないのでしょうか。

たとえば、昨日からお腹が痛むという18歳の女性が診察室にいられた場合、医師が行うのは、なぜ、今そのような症状が起こっているのかという「謎解き」です。そのためには、問診でその症状はいつから、どのような性状なのか、増悪・寛解する要素はあるのかななどの情報も得ながら、身体所見を診察し、必要に応じた検査をオーダー。それらの結果を踏まえて、たとえば「虫垂と呼ばれる臓器に炎症が起こっているために、昨日からの症状が起こっている」という自分の「謎解き」を披露します。これは「急性虫垂炎」という病名を診断することです。

診断が決まれば、治療法は決まってきます。あとは型どおりの治療を行っていくということになります。たとえば、手術が適応されたとして、実際に虫垂が炎症を起こしており、それを切除することで症状が改善すれば、当然のことながら、患者・医療専門職双方からその診断・治療をした医師への信頼が生まれます。言葉を換えれば、「先生が言った通りだった」というところがポイントだと思うのです。

専門性に裏打ちされた知識を理論背景に薬剤師ならではの「謎解き」を

薬剤師の「謎解き」は、医師のそれとは理論背景が異なります。医師は解剖・生理学、病理・病態学に基づきますが、薬剤師は薬理・薬物動態学、製剤学といった薬剤師の専門生を裏打ちする知識を理論背景とした「謎解き」を行わなくてはなりません。

特に、生活習慣病など長期にわたって服薬を行うケースが増えている現在の医療では、さまざまな症状の出現や変化が薬によって起こっている場合が少なくありません。特に、超高齢社会を迎えたわが国では、肝・腎機能が低下し、通常の投与量では過剰投与になってしまう可能性が高まっているとも言えます。

たとえば、食欲不振、悪心・嘔吐などが見られたときに、感冒や細菌性腸炎によるものではなく、ジギタリス中毒による症状ではないかという「謎解き」です。さらにもっと大切なのは、なぜ、現在の投与量でジギタリスの血中濃度が高くなってしまったのかということ、体格・腎機能・併用薬などの情報も活用してクリアカットに「謎解き」することだと思います。

この、薬剤師でしか行えない「謎解き」の結果が、医療チーム全体の知識として共有されるようになってきたときに、薬剤師のあり方は6年制薬学教育にふさわしい形に変わっていくのではないかと思います。